

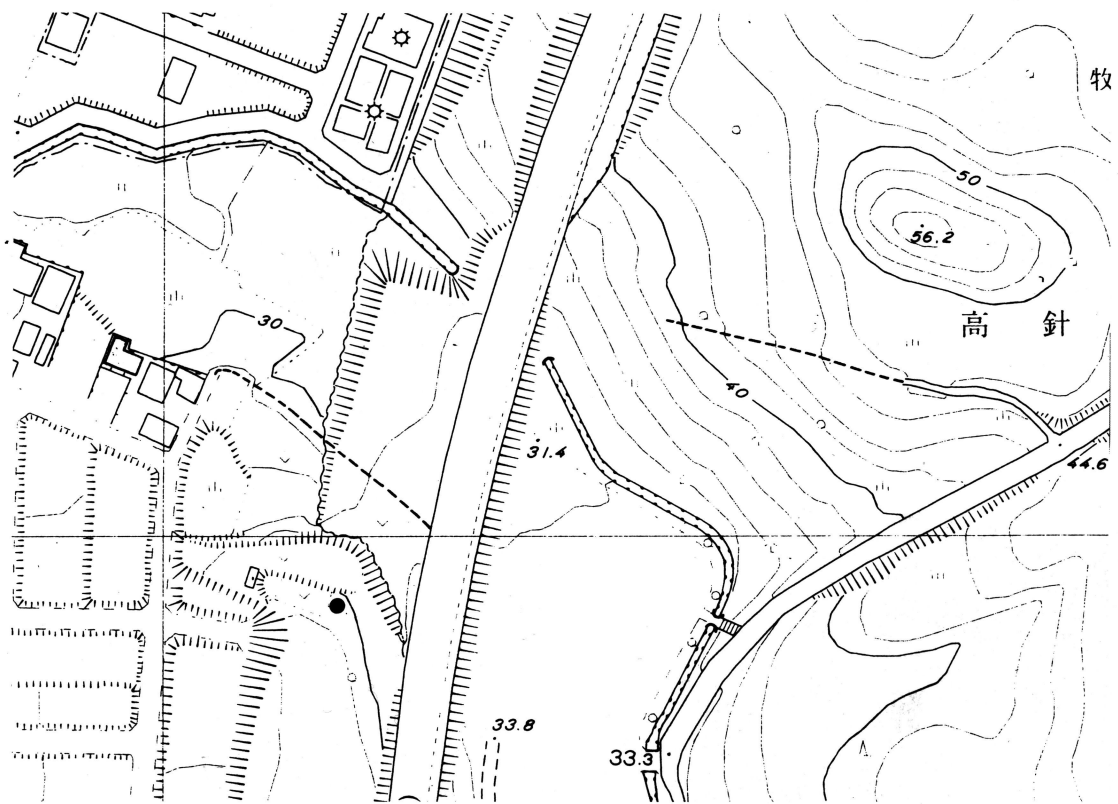
たかはりはら
高針原 1 号窯跡

調査の経過 高針原 1 号窯跡は、名古屋市名東区に所在する。地形的には北側に向けて傾斜する緩斜面で、調査直前には道路の予定用地のみこれが残存していた。

今回の調査は、国道302号線建設に伴う事前事業として実施し、調査面積は1,000m²である。

調査の概要 調査の結果、窯体（SY01）1基と、これに伴う灰原や、排水溝（SD01）などを検出した。窯体は全長7.6mが残存し、北向きに開口する。構造は、燃烧室上部に舟底ピットを付設する窖窯で、烧成室上部が開墜により消失している。壁面は、最大残存高1.6m。表面にはスサ入り粘土を貼付した補修痕が著しく、烧成室の築窯当初の最大幅が、2.8mをはかるのに対して、最終面では1.9mとなっている。舟底ピットは、烧成室下部に設定されている。平面は楕円形で、長径3.3m、短径1.4mをはかる。埋土は燃烧室の埋土とは明らかに異なり、壁面に被熱は確認できない。ただし埋土上面には被熱した床面は確認できなかった。

一方前庭部は、焚口前面の地山面を掘削して形成されたもので、平面が円形を呈する。床面積は約9.0m²をはかる。前庭部の前面には、周堤部が確認できた。周堤部は地山土を整地したもので、面積は、約60.6m²をはかる。なお、これら諸施設の中央部分には、排水溝（SD01）が設置されている。主軸は窯体とほぼ同一で、灰原に向けて伸びる。



第1図 調査地点位置図（1：2500）

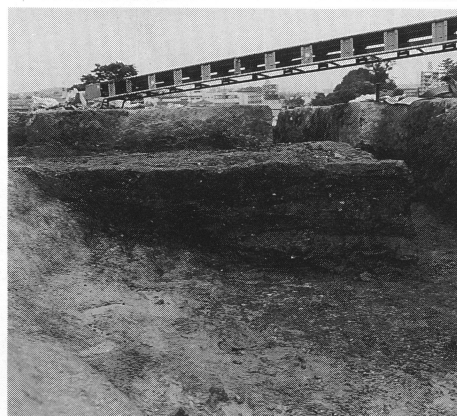


調査区全景



左 SY01

右 SY01右壁



左 灰原

右 前庭部

第2図 調査風景



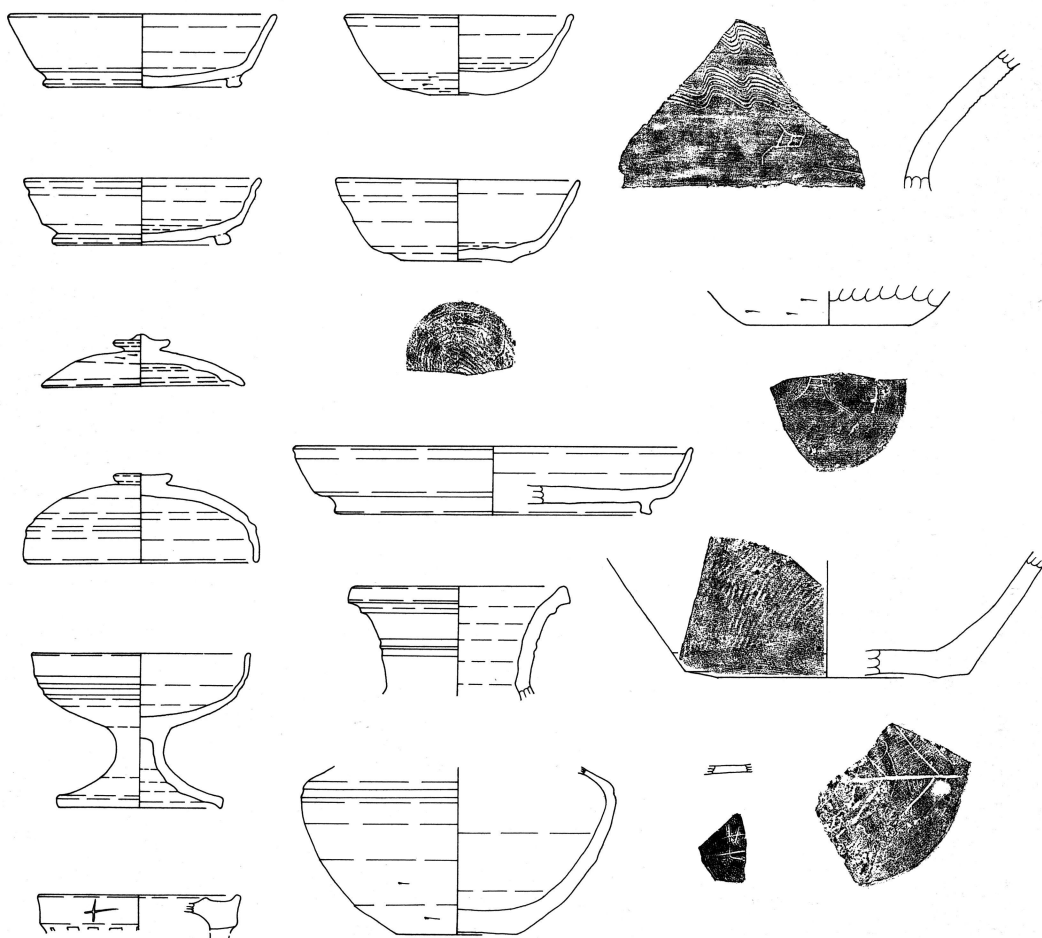
第3図 航空写真

全長7.0mを検出し、幅は0.3m、検出面からの深さ0.3mをはかる。埋土は上部を覆う灰層と同一となる。

灰原は面積350㎡検出した。最大残存高は約2.0mにも及び、やや大規模となる。しかし、上面がほぼ全域にわたって0.3～0.4m程度攪乱されているほか、北側は耕作などにより一部をカットされており、残存状況は良好とはいえない。

今回の出土遺物には、SY01の焼成品と考えられる須恵器の他、窯道具がある。図示した資料は15点で、すべて須恵器となる。特殊な器種等は、現時点では確認できないが、『月』の刻書は注目できる。時期は、岩崎17号窯式～岩崎41号窯式を中心とするが、これを前後した資料が若干加わる。窯道具には、焼台、分炎棒がある。前者には、直径10cm大の自然石や、甕などの大型品の須恵器片を転用したものなどがある。

今回得られた資料は、実体が不明確であった7世紀後半の猿投窯の生産構造を考える上で重要な手がかりとなろう。
(池本正明)



第4図 出土遺物（1：4）